

願文語彙の量的構造：文体組成の究明に向けて

著者	山本 真吾
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	12
ページ	1-13
発行年	2001-06-24
URL	http://hdl.handle.net/10076/6570

願文語彙の量的構造—文体組成の究明に向けて—

山本 真吾

○キーワード—願文、願文語彙、語彙の量的構造、文体組成、

本朝文粹、漢語、大野の法則

一、はじめに

願文とは、諸種の法要において祈願の意趣を施主の立場から申し述べる文章である。これには、神祠修善や供養塔寺また追善などさまざまな種別があるが、平安・鎌倉時代にあつては、旺盛な社会的需要に支えられて廃れることなく脈々と書き継がれ、今日数多くの作品が残っている。

その文体は、対句表現を主軸とする漢文の駢儷体であり、仏事・法会に係る文章でありながら、多く文章博士など儒者の手によって草され、古来漢詩文集にその位置を与えられている。

この願文の言語的構造の特徴に注目して文体研究を志向する場合、如何なる視点が有効であろうか。旧稿^庄において、一対句表現、二類型句形式、三文章構成、四語彙等の視点を提示し、四については、追善願文の語彙を記録的表現を担当する語彙と修辭的表現を担当するそれとに大別し、後者の担う象徴的意味及びそれと文章構成との相関を観察することで文体を説明せんと試みた。

本稿は、これを承けてその全語彙の量的構造を明らかにし、文体組成の究明に資することを目的とするものである。

二、文体組成論としての語彙研究

西田直敏氏は、平家物語の文体論的研究を展開する中で、文体基調論・文体組成論・文体様相論に三分された^庄。このうち、文体組成とは、表現を具体的に形成する一つ一つの語の総体を把握し、使用語彙の量的構造を明らかにすることで分析されるものである。

願文の文章を形成する語の総体をここでは「願文語彙」と呼称する。この願文語彙の量的構造を把握し、語彙の性格を解明することにより願文の文体組成が究明されることになる。

従来、一作品の語彙の全体像とその性格を明らかにするための方法として、主として行われてきたのは、

- ① その作品に使用された全語数を把握するための異なり語数と延べ語数の調査
- ② 異なり語数、延べ語数それぞれの品詞別の構成比率の調査
- ③ 語彙を構成する各語の使用度数、及びその分布の調査
- ④ 和語、字音語など語の出自別構成比の調査

といった計量的方法であつた。^(注5)

右の他、意義分類を施した『分類語彙表』等に基づく調査、また、近時、精力的に推進されている比較語彙論の方法なども注意される。^(注6)

これらの計量的方法に拠る語彙研究は、古典に限らず文学作品を対象としてしばしば行われるが、しかしながら、かかる研究成果に対する文学研究者の評価はその莫大な作業に費やされた労力に賛辞を表しつつも、総じて「機械的」「常識的」などと評される如くに必ずしも高くないように見受けられる。

文学研究者が取り組む表現研究の多くは、作品を深く読解する過程において感知された、特定の鍵となる語もしくは句の表現に注目し、その用法を詳細に追求する方法である。

小論の筆者も、これまで、語彙の視点から、漢詩文集に収録された文学作品たる願文の文体分析を行うに際しては、分析対象とする願文を精読する中で、強く文体印象を与えると予想される特定の語を取り上げ、それが担う象徴の意味を析出し、美辞麗句を連ねた駢儷文における表現素材の特徴を認める方法を採用してきた。^(注7)

しかしながら、かかる特定の語に注目する方法で問題となるのは、そもそもそれが当該作品の文体印象に強く影響するキーワードであるといった前提自体を証明することが困難なことがある。多くは研究者の主観に委ねられているのが実態であろう。加えて、もしこの問題をさしあたり留保するにしても、そのキーワードが当該の願文の文章中に用いられる全語彙の中で如何なる位置を占めるのが不明のまま

までは、このようにして特徴的と判断した語をいくつ取り上げればよいか、またその分析をいくら積み重ねれば文体が記述できるのかといった問題についての見通しが得られないように思われる。

本稿では、このような、計量的方法⇨客観的ではあるが常識的、キーワードに注目する方法⇨本質的ではあるが主観的・印象的、といった双方に存する短所、方法的問題の溝を埋めるべく、これまで採用してきた後者の「キーワード」の分析をここでも繰り返すのではなく、まずは、いったい願文にはどれくらいの量の語彙が用いられて、どのような品詞のものが多くのか、また和語と漢語の比率はどうであるかさらにこれまで、願文作者が表現の綾に工夫を凝らし技巧を重んじたものとして注目してきた漢語について、いったいどのような語の使用度数が高いのか、またそれはどのような性格を有するのか等について、計量的方法を用いて考察しようと思ふ。

三、分析対象と方法

願文は、時代を平安時代に限定しても僅に二百を超える作品が現在知られており、^(注8)なお将来も発見される可能性がある。右のような研究の成立のためにはこのすべての願文を対象としてそれぞれに全語彙索引が用意されていることが理想である。しかし今日の未だ緒に付いたばかりの願文研究の段階で直にこれを望むことはできない。

ここでは、平安時代の願文語彙の典型を示すと思われるものとして、『本朝文粹』巻第十三「願文上」に所収の願文十二篇を取り上げ、この中に用いられているすべての語彙を対象として調査を進めるこ

とした。

『本朝文粹』は、藤原明衡が編纂した漢詩文集で、天曆年間を中心に平安初期から後期に亙る二百年間を通じての、平安朝漢詩文集の代表的存在である。そこに模範文例として採択された願文は、願文語彙のサンプル調査を行うに適當であろう。また、『本朝文粹』の古写本には訓点が稠密に施されているものが多く、日本漢文についてしばしば困難である語の認定にも好条件を備えていると思われる。ここでは久遠寺本を採用し、その訓点に従って全文訓み下し、それに基づいて語を認定した。久遠寺本は最明寺禪門北条時頼の本を文永六く八年(一二二九く七二)に書写し、これをさらに建治二年(一二七六)に転写したもので、底本は北条時頼が清原教隆に命じて加点させたものであるという。もとよりこの久遠寺本による訓読が平安時代のそれとは距離のあることは認めるべきであるが、『本朝文粹』を精確に書写読解し、平安時代以来の博士家の学問を継承する人物の加点になるものであって、他にかかる好条件を具有する写本が得られない現在、このテキストに従うことは必ずしも不適當ではないように思われる。

『本朝文粹』には、この卷第十三「願文上」に神祠修善・供養塔寺・維修善の願文が、卷第十四「願文下」に追善願文が収録され、いさゝかその内容を異にしている。本稿では、このうち、卷第十三にひとまづ限定することとした。追善願文にはまた別の性格を認めるべきかと思われるが、この点については、少なくとも本稿で得られた願文語彙の性格に関しては、これを追善願文にも括弧してあげることが可能のようであり、両者に共通する性格であるものと予想される。

『本朝文粹』卷第十三所収の願文は、次のようである。

〔神祠修善〕

- 1、賽管丞相願願文 慶保胤
- 2、於尾張國熱田社供養大般若經願文 江匡衡

〔供養塔寺〕

- 3、村上天皇供養雲林院塔願文 江納言
- 4、為左大臣供養淨妙寺願文 江匡衡
- 5、供養同寺塔願文 江匡衡
- 6、為盲僧真救供養率天婆願文 江匡衡

〔雜修善〕

- 7、朱雀院被修御八講願文 江納言
 - 8、朱雀院平賊後被修法會願文 後江相公
 - 9、供養自筆法華經願文 前中書王^ヲ
 - 10、為空也上人供養金字大般若經願文 善道統
 - 11、為仁康上人修五時講願文 江匡衡
 - 12、為齋然上人入唐時為母修善願文 慶保胤
- 以下に、右の諸作品について、汲古書院刊行の影印に拠って訓み下し、これを語に分ち、パソコンを用いて計量的操作を加えることとする。語に認定についても、看過しがたい複雑な問題が存するが、ここでは概ね諸先^{（注）}学の認定基準に準拠することとした。

四、品詞別に見た願文の異なり語数と延べ語数

右の1く12の作品のそれぞれを訓み下し、これを願文語彙のサンプルと捉えて総語彙を品詞別に数えた。

【表1】 本朝文粹願文上所用語彙統計表

	異なり語数	延べ語数	一語当たりの平均使用度数
名詞(含代名詞)	1,538(71.4%)	2,413(58.9%)	1.6
動詞	440(20.5%)	1,068(26.1%)	2.4
形容詞	33(1.5%)	102(2.5%)	3.1
形容動詞	24(1.1%)	31(0.8%)	1.3
副詞	98(4.6%)	342(8.3%)	3.5
接続詞	12(0.6%)	40(1.0%)	3.3
感動詞	3(0.1%)	17(0.4%)	5.7
連体詞	6(0.3%)	83(2.0%)	13.8
計	2,154(100.1%)	4,096(100.0%)	1.9

【表2】 慈恩伝古点との比較(大野の法則)

	本朝文粹願文上	慈恩伝古点
名詞	1,538(71.4%)	8,634(73.8%)
動詞	440(20.5%)	2,183(18.7%)
形容詞	33(1.5%)	92(0.8%)
形容動詞	24(1.1%)	554(4.7%)
その他	119(5.6%)	231(2.0%)
計	2,154(100.1%)	11,694(100.0%)

これを集計した結果、表1が得られた。

これに拠れば、願文十二篇の総語彙は、異なり語数で二、一五四語、延べ語数にして四、〇九六となる。因みに一篇当たりの語彙量は、平均して異なり語数で一八〇語、延べ語数で三四一語である。

異なり語数について品詞別に見ると、名詞が最も多く一、五三八語で全体の七一・四%を占め、ついで動詞四四〇語(二〇・五%)、以下副詞九八語(四・六%)、形容詞三三語(一・五%)、形容動詞(一・一%)、接続詞二二語(〇・六%)、連体詞六語(〇・三%)、感動詞三語(〇・一%)と続く。

次にいわゆる「大野の法則」と呼称される品詞別の語彙構成の割合と作品ジャンルとの相関について見てみる。

「大野の法則」とは、水谷静夫氏の説明に従えば、任意の対象領域(作品)甲・乙・丙の上の各語彙について、名詞の割合をそれぞれX、x、X、また(名詞以外の)しかるべき品詞的語類の割合をそれぞれY、y、Yとすれば、近似的に、

$$\begin{array}{l} y \sim Y \\ x \sim X \end{array} \quad \parallel \quad \begin{array}{l} Y_1 \sim Y \\ X_1 \sim X \end{array}$$

しかも、同じジャンルの作品はこの構成比が似ているという経験的相関が見出されるといふものである。

大野博士の分類に従って、名詞・動詞・形容詞・形容動詞とその他

【表3】 和語と字音語の内訳

	異なり語数	延べ語数	平均度数
和語	716(33.2%)	2,118(51.7%)	3
字音語	1,438(66.8%)	1,978(48.3%)	1.4
計	2,154(100.0%)	4,096(100.0%)	1.9

【表4】 字音語の品詞別内訳

	異なり語数	延べ語数	平均度数
名詞	1,294	1,740	1.3
動詞(漢語サ変)	127	217	1.7
形容動詞(ナリ活・タリ活)	13(内タリ活:3)	15(内タリ活:4)	1.2
副詞	4	6	1.5
計	1,438	1,978	1.4

(副詞・接続詞・感動詞・連体詞。助詞・助動詞は除外)に分ち、算定したものが、表2である。

源氏物語をはじめとする和文とかけ離れていることは言うまでもなく、築島裕博士がこれと比較された慈恩伝古点のデータと併せて示してみた。

大野「第八表」のグラフに当て嵌めてみると、表の外の遙か左側にはみ出し、最右端にある源氏物語とは最も相隔たっている点など、やはり訓点資料の性格と共通していることが確認される。慈恩伝古点も源氏物語に比して形容語(形容詞・形容動詞)の割合が少ない点特徴的であったが、願文はこの割合をさらに下回る。

五、願文語彙における和語と字音語の比率

概して訓点資料には和文に比して多くの字音語が使用されており、文体組成の一特徴を成すものと見られる。ここでは願文語彙における和語と字音語の比率をもとめてみる。

字音語とは、いわゆる漢語のことであるが、ここでは「安置す」「講説す」「感す」の如き漢語サ変動詞や、「清浄なり」また「寂寂たり」といった漢語形容動詞(ナリ活用、タリ活用)、また「微妙に」のような漢語副詞の「混種語」と呼称されるものも字音語に含め、和語との比較を行う。

表3に拠れば、異なり語数にして字音語は、和語の七一六語のおよそ二倍の一、四三八語の使用が認められる。但し、延べ語数との関係で見ると、和語の総語彙量の方が字音語を上回り、平均使用度数にし

て、和語3に対して、字音語は一・四とその半分程度に過ぎない。

また表4では、字音語の内訳を見てみた。漢語サ変動詞などに比して、圧倒的に名詞の占める割合が高く、異なり語数一、二九四語、延べにして一、七四〇語であり、全体の九割にものぼる。

六、願文語彙における字音語及び和語の性格

右の観測によって、願文語彙における字音語の占める割合が高く、質のみならず量的に重要な意味を持つことが確認された。

この字音語について、さらに使用度数の高いものから順にその分布を見たものが表5である。

字音語の総語彙数は、異なり語数で一、四三八語、延べ語数にして一、九七八語を数えるのであるが、どの願文にも頻用されるといったいわゆる基幹語彙と認むべきような字音語は無いということが知られる。つまり、使用度数11以上の語は極めて少数であって、異なり語数で七、延べ語数でも一〇五を数えるにとどまり、全体の〇・五%でしかない。高使用度数の基準をどこに置かかはそれ自体問題であるが、仮に使用度数4以上(これも十一篇中に四回使用を数えるに過ぎないので三篇中に一度といった程度である)としても、異なり語数で五三語、延べ語数で三四二語であって、異なり語数にして三・七%(延べでは一七・三%)と僅かである。

今、この五三語について、どのような性格を有しているかを考察するために、まず『本朝文粹』所収の他のジャンルの作品の語彙と比較し、共通する度合いを調べた。さらに、参考として、いわゆる和漢混清文の代表とされ本朝文粹との関係も指摘される平家物語及び古今

物語集を取り上げ、また色葉季類抄との一致・不一致の状況も調査してみた。

この表6により知られることは、第一にこれらの大部分は本朝文粹以下の他のジャンルの作品と共通するものが大部分であり、願文特有と認めべき特殊な字音語は極めて少数であるということがある。

大部分の字音語は、『本朝文粹』の他のジャンルにも認められ、いわゆる和漢混淆文の説話や軍記物語にも普通に使用されるものが大部分である。

少数ながら、特徴的な字音語としては、『本朝文粹』の他のジャンルには見えず、追善願文を含む願文にしか見えない語(表6◎印)として、名詞では「仏子」、「願文」(但し1例を除いて標題に使用)、「齋然」、「地祇」、「過去」、「造塔」、「智慧」、「妙覚」、サ変動詞では「図す」が挙げられる。また少し枠を抜けて大部分が願文に集中し、他のジャンルとは言っても呪願文、諷誦文、表白などの仏事に関する文章に限って用いられるもの(表6△印)としては、さらに「敬白」、「釈迦」、「三宝」、「文殊」、「四恩」、「供養す」などを挙げることができる。このうち、「齋然」、「釈迦」、「文殊」の如き固有名詞、また標題や冒頭末尾の常套句に使用の「願文」、「敬白」を除けば、一〇語程度でしかない。しかも、これらの字音語も大抵今昔物語集や平家物語などの作品にも使用されるものであり、「願文特有語」などと認めることには抵抗を感じるものである。また上記の語は、原則として旧稿^(注三)における「記録の意味」を専ら担当するものであり、美的・修辭的表現を形成し「象徴的意味」を担う語群ではないことも見逃せない。

つまりは、総じてこういつた使用度数の比較的高い字音語は、願文に特有のものではなく、他の漢詩文や説話・軍記物などにも共通して常用性の高いものであり、と同時に象徴的意味を重ねて願文の文体印象を強く發揮する語群では無いと判断されるものである。

これまで、主として考察の対象となつたのは、願文の中にあつて美的・修辭的表現に参与し象徴的意味を担つて特徴的に用いられた語が多かつた。しかしこれらの語はいずれも願文にあつて必ずしも願用されるものではなく、むしろ使用度数1乃至2程度のものに偏ると見られる。これらは常用性は低いもののそれだけに文章の中に玉と光りその文体印象を際立たせることに結果しているものと理解されるのである。

第二に気づかれるのは、内容から見て当然のことであるが、仏教語の多いことはやはり指摘しておかねばならないだろう。

これと関連して、多く慣習的に仏教語は呉音で読まれ、従つて、久遠寺本『本朝文粹』古点の合符は、その位置によつて音・訓の違いのみならず、音よみの場合でも、漢音(中央)、呉音(右側)といったやや特殊な区別がなされている。これは『本朝文粹』が漢詩文集でありながら、ここで問題としている願文などの仏事に関する文章をも収めることと無関係ではないと見られている。

ここで、この合符の位置によつて示された漢音・呉音の区別に拠つて、その比率を算出してみた。

但し、先学の指摘にあるように^(注四)、これらの合符が厳密に漢音・呉音を弁別できているかについてはやや不正確な部分も存するようであり、声点や仮名音注と合符の位置により示される漢・呉の区別が

【表5】 字音語の使用度数の分布

使用度数	異なり語数	延べ語数	累計語数
11～(22)	7	105	105
10	1	10	115
9	2	18	133
8	2	16	149
7	2	14	163
6	6	36	199
5	11	55	254
4	22	88	342
3	45	135	477
2	161	322	799
1	1,179	1,179	1,978
計	1,438	1,978	1,978

【表7】 漢音よみと呉音よみの内訳

漢音よみ	596(44.3%)
呉音よみ	750(55.7%)
計	1,346(100.0%)

【表6】 高使用度数漢語における他文献の出現状況

使用度数	漢語	品詞	本朝文粹	平家物語	今昔物語集	色葉字類抄
22	敬白	名	△(祭392)	○	×	×
18	仏子	名	◎	×	○	×
17	弟子	名	○(書188)	○	○	○
13	願文	名	◎	○	○	×
12	供養す	サ変動	○(讃357)	○	○	△
12	修す	サ変動	○(意67-1)	○	○	△
11	衆生	名	○(奏146)	○	○	×
10	功德	名	○(詩276)	○	○	△
9	願	名	○(奏144)	○	○	×
9	如来	名	○(和348)	○	○	×
8	変す	サ変動	○(官63)	○	○	○
8	齋然	名	◎	×	○	×
7	地	名	○(官63)	○	○	○
7	仏法	名	○(奏147)	○	○	△
6	期(こ)す	サ変動	○(对94)	○	○	○
6	功	名	○(对85)	○	×	○
6	釈迦	名	△(呪394)	○	○	×
6	善根	名	○(詩310)	○	○	×
6	天	名	○(賦15)	○	○	○
6	天神	名	○(和342)	○	○	△
5	帰す	サ変動	○(表123)	○	○	○
5	囚す	サ変動	◎	×	○	△(名)
5	一部	名	○(序199)	○	○	×
5	経	名	○(詩241)	○	○	○
5	三宝	名	△(飄430)	○	○	×
5	三昧	名	○(詩276)	○	○	○
5	道場	名	○(奏145)	○	○	○
5	地紙	名	◎	○	○	×
5	法華経	名	○(詩237)	○	○	△
5	妙法	名	○(和349)	○	○	×
5	文殊	名	△(呪394)	○	○	×
4	屈す	サ変動	○(表130)	○	○	×
4	証明す	サ変動	○(書192)	△(名)	○	△
4	浴す	サ変動	○(奏161)	○	×	△(名)
4	礼す	サ変動	△(廻399)	○	○	○
4	一乗	名	○(詩310)	○	○	×
4	香花	名	○(詩311)	○	○	○
4	過去	名	◎	○	○	×
4	期(こ)	名	○(表130)	○	○	○
4	造塔	名	◎	×	×	×
4	四恩	名	△(奏148)	○	○	×
4	十月	名	○(書187)	○	×	△
4	莊嚴	名	○(詩336)	○	○	×
4	朱雀院	名	○(詩230)	×	○	×
4	多宝	名	○(詩280)	×	○	×
4	智恵	名	◎	○	○	○
4	天下	名	○(詔44)	○	○	×
4	菩提	名	○(詩276)	○	○	○
4	無辺	名	○(雑42)	×	○	×
4	妙覚	名	◎	×	×	×
4	文(もん)	名	○(奏146)	○	○	○
4	理(り)	名	○(奏155)	○	○	△(サ変)

(注)本朝文粹:◎願文(含追善願文)にのみ使用。△仏事の文章に使用。○仏事以外の文章に使用。
平家物語・今昔物語集・色葉字類抄:○使用・登載。×不使用・不登載。△使用されるも品詞や読み等が異なるもの。

【表8】和語(名詞)の高使用度数語

和語(名詞・代名詞)	品詞	使用度数
これ	代	32
ため	名	25
ところ	名	20
ところ	名	19
いま	名	16
み(身)	名	14
もの	名	14
うち	名	13
ひと(人)	名	12
ひ(目)	名	10
われ	名	10
のち	名	9
はは(母)	名	9
なに(何)	代	8
とき	名	8
め(眼)	名	8
とし	名	7
なにがし	名	7
ほとけ	名	7
くも(雲)	名	6
はな	名	6
ひかり	名	6
それ	代	5
かせ	名	5
つゆ	名	5
ともがら	名	5
はじめ	名	5
ひとつ	名	5
みづ	名	5
あき(秋)	名	4
うへ(上)	名	4
おもひ	名	4
かげ	名	4
こと(事)	名	4
さき	名	4
たより	名	4
ちから	名	4
つき(月)	名	4
つち	名	4
てら	名	4
なみだ	名	4
ねがひ	名	4
ひとり	名	4
やま	名	4

【表9】和語(動詞)の高使用度数語

和語(動詞)	使用度数		
たてまつる	23		
う(得)	21		
おもふ	20		
あらず	19		
いたる	15		
きく(聴)	13		
なす	12		
あふ	11		
みる	11		
おこす	10		
およぶ	9		
たつ	9		
むかふ	9		
しる	8		
す	8		
ひらく	8		
まう	8		
いづ	7		
かへる	7		
したがふ	7		
つくる	7		
てらす	7		
とく(説)	7		
のぶ(延・展)	7		
まうす	7		
いふ(謂)	6		
かく(書)	6		
かさぬ	6		
すすむ	6		
とどむ	6		
ほどこす	6		
うく(受)	5	~	~
かうぶる	5	あはす	4
きたる	5	あふぐ	4
さる	5	いたす	4
しかり	5	いのる	4
すつ	5	いる(入・籠)	4
たづぬ	5	かざる	4
つたふ	5	けす	4
とぐ	5	たもつ	4
みつ(満)	5	たる(垂)	4
もとむ	5	つく(就)	4
もよほす	5	よる	4
よす(寄)	5	わする	4
あたふ	5	わたる	4

一致しない事例も見られ、また漢吳混説語などの場合にも異例が少なくないようである。しかしながら、双方の大まかな割合は知ることができ、甚だしい誤りに陥ることはないと思される。

表7に示すとおり、十二篇について、二字以上の字音語のよみを合符によつて示している箇所は、延べ一、三四六箇所であった。このうち、漢音を指示するものは五九六、吳音を指示するものは七五〇であり、前者四四・三%、後者五五・七%と、吳音の方が一〇%ほど多くなっている。柏谷嘉弘氏のサンプル調査に拠れば、

『本朝文粹』全体では漢音よみ八二・七%、吳音よみ一七・三%であり、願文の文章中にいかに吳音よみの語の比重が高いかは容易に察せられることと思う。もとより「当国(タウゴク)」や「今日(コンニチ)」などのように吳音よみの語がすべて仏教関係の語ではない(逆に「金輪(キンリン)」の如くに仏教語でありながら漢音よみのものもある)が、これだけ願文の吳音よみの語の比率が高いことはかかる仏教法要の内容、作成的と無関係ではなからう。

同様にして、和語についても、比較的使用度数の高いものを掲げてみる。割合の極端に小さい形容詞・形象動詞を含めると安定を欠くので、名詞と動詞に限つて示してみる。

名詞(代名詞を含む)について、使用度数の高い順に並べてみたのが、表8である。これを万葉集・枕草子・源氏物語・徒然草四作品に共通する語彙と対照させてみると大部分が一致するこ

とがわかる。四四語中四作品共通語彙に見えないのは、「たより」「ちから」「なにがし」「ともがら」「ねがひ」「ひかり」位である。

また、動詞について示したのが、表9である。

これもほとんど万葉集以下の四作品に共通の語彙と重なっていることが知られる。一致しないものには「きたる(来)」や「けす(消)」のごとき訓説語が含まれていて、この四作品共通語彙にさらに慈恩伝古点の語彙を含めてみると、「あたふ」「あらず」「いたす」「いたる」「およぶ」「かうぶる」「かざる」「しかり」「したがふ」「すすむ」「ひらく」「つたふ」「てらす」とぐ「ほどこす」「もよほす」の諸語もことごとく一致するのである。因みに、名詞の「たより」以下の六語も、「なにがし」を除いて慈恩伝には見えるものである。

以上、要するに、願文語彙の場合、和語についても比較的高い使用度数を示すものにそれ特有といった性格を帯びたものは認めがたいのであつて、字音語について見たことはやはり和語についても概ね当て嵌まることが確認された。

七、願文の文体組成—今後の課題—

本稿では、『本朝文粹』巻第十三「願文上」所収の願文十二篇を標本として取り上げ、これを対象として、その全語彙に計量的操作を加えて願文語彙の性格を考察してきた。ここで採用した方法自体は決して斬新なものではなく、これまで他の文学作品など

ではしばしば採られきた常套的なものである。またここで得られた知見もおおよそ当初より予見できたことばかりであってそれを具体的に確認したにすぎない。しかしながら、これまで願文に用いられるすべての語を対象に計量的調査をした報告はなく、また最初に述べたように、恣意的、主観的に「特徴的」な語をつまみ食いするだけでは、語彙から見た願文の文体特徴を浮かび上がらせ、その文体組成を究明することはできないとの思いを強くし、調査に着手した次第である。

今後、標本とした『本朝文粹』卷第十三「願文上」のみならず、卷第十四「願文下」の追善願文、さらには『性靈集』、『菅家文草』、『江都督納言願文集』などに収録された主な願文について同様の調査を行い、所論の補正に努めると共に、これらを通時的に観測することにより、願文における語彙の撰取・影響といった問題にも接近したいと考えている。

注

1 山本真吾「『本朝文粹』所収追善願文における人名語彙の象徴的意味について」(『三重大学日本語学』7、平成8・6)。

山本真吾「平安時代の追善願文における「松」の象徴的意味について―文章構成との関わりから―」(『国語語彙史の研究』17、平成10・10)。

山本真吾「表白・願文の用語選択―金沢文庫本言泉集の記述をめぐって―」(『訓点語と訓点資料』102、平成11・3)。

2 西田直敏『平家物語の文体論的研究』(昭和53、明治書院)

第一篇総論第二章平家物語の文体研究―課題と方法―。

3 注2文献第二篇各論第二章平家物語語彙の性格。

4 浅見徹「古代の語彙II」(『講座国語史3 語彙史』第三章、昭和46、大修館書店)。

5 田島毓堂『比較語彙研究序説』(平成11、笠間書院)。
注1文献。

渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』(平成3、勉誠社) 第四篇願文の世界。

但し、渡辺秀夫「願文用語略稿」(国文学研究資料館文献資料部『調査研究報告』9、昭和63・3)は願文語彙の総体を観測する志向が窺え貴重な業績である。

6 山本真吾「平安時代の願文に於ける冒頭・末尾の表現形式の変遷について」(『広島大学文学部紀要』49、平成2・3)

7 阿部隆一「本朝文粹伝本考―身延本を中心として―」(『重要文化財 本朝文粹』解題、昭和55、汲古書院)。

8 大野晋「基本語彙に関する二三の研究―日本の古典文学作品に於ける―」(『国語学』24、昭和31・3)。

築島裕「平安時代の漢文訓読語につきての研究」(昭和38、東京大学出版会) 第四章漢文訓読語の語彙。

9 水谷静夫「大野の語彙法則について」(『計量国語学』35、昭和40・12)。

10 注8築島文献。
注1文献。

11 柏谷嘉弘「日本漢語の系譜―その撰取と表現―」(昭和62、東苑社) 第五章本朝文粹の漢語。

15 14 13

山本秀人「音合符における漢音、吳音の区別について」久遠寺本「本朝文粹」を中心に」（国語学会中国四国支部第三十一回研究発表、『国語学』148及び同154参照）。

注11 柏谷文献。

注8 大野文献。

これも枕草子や源氏物語、宇津保物語に見えるものであり、特殊なものとは認められない。

「やまもと しんご」 本学教員